

に建つるに會し、蘇伐疊往て突厥に屬す。太宗の貞觀四年(六百三)馬を獻す。郭孝恪の焉耆を討つや、王兵を發して焉耆を援ひ、後遂に貢せず。蘇伐疊死し、弟阿黎布失畢立つ。帝龜茲の焉耆を助くるを怒り、阿史那社爾に命じて討伐せしむ。社爾兵を五道に分ち、先づ焉耆王阿那支を擒にす。龜茲各城皆潰ゆ。社爾進んで王城を拔き、郭孝恪を留めて居守せしむ。王、保撥換城に投ず。社爾又討て遂に王及其弟羯獵顛を捕ふ。王の相、那利、夜逃れて西突厥の兵を借り來り、唐兵を攻む。孝恪之に死す。郎中崖、義兵を募て、那利を捕へ、社爾假に王弟葉護を立つ。高宗の永徽初年(六百五)阿黎布矢畢を龜茲王に封じ、那利、羯獵顛を放還す。後、王來朝す、其歸るに及び、羯獵顛拒んで納れず、王爲めに憂死せり。揚胃兵を發して直に羯獵顛を獲其地に龜茲都督府を置き、王子素稽を立て、都督に拜す。顯慶三年(六百八)安西都護府を龜茲に移し、于闐(今の和闐)碎葉(今の喇沙爾)疏勒を統べ之を安西の四鎮と稱す。故に龜茲をば又安西と呼べり。元代には苦先と云ふ。

沙雅爾城は、南東二日行程に在る一小都會にして、沙雅縣衙門の所在地とす。人家約七百、土地卑濕、菓瓜善く實り、梨最も名あり、四邊葦澤に充ち、虎、狐、狸、獐、獬、獾の巢